

平成29年度秋田県総合政策審議会
第2回稼ぐ農林水産業創造部会 議事要旨

1. 日時 平成29年9月4日（月） 午後3時30分～午後5時
2. 場所 秋田県議会大会議室
3. 出席者

【農林水産部会委員】

福 森	卓	（古河林業株式会社阿仁林業所所長）
佐々木	昭	（秋田県漁業士会会長）
正 木	俊 介	（株式会社ドリームリンク専務取締役）
今 野	克 久	（有限会社今野農園代表取締役）
柴 田	ますみ	（秋田市農業委員会委員）
高 橋	徹	（秋田しんせい農業協同組合常務理事）

【県】

湯 元	巖	（農林水産部次長）
千 葉	俊 成	（農林水産部参事（兼）水産漁港課長）
山 本	拓 樹	（農林水産部農林政策課長）
皆 川	知	（農林水産部農業経済課長）
本 藤	昌 泰	（農林水産部農業経済課販売戦略室長）
伊 藤	真 人	（農林水産部農山村振興課長）
佐 藤	幸 盛	（農林水産部水田総合利用課長）
齋 藤	正 和	（農林水産部園芸振興課長）
小 坂	純 治	（農林水産部畜産振興課長）
齋 藤	俊 明	（農林水産部林業木材産業課長）
櫻 田	良 弘	（農林水産部森林整備課長）
大 友	義 一	（観光文化スポーツ部秋田うまいもの販売課長）
舛 谷	雅 広	（農林水産部農地整備課政策監）

【事務局】

秋田県農林水産部農林政策課

4. 部会長あいさつ

◎福森部会代理

お忙しい中、お集まりいただき、感謝する。深沢部会長は所用により欠席するとのことで、部会長代理として進行等を務めさせていただく。不慣れではあるが、御協力いただければと思う。

豪雨災害について少し話をさせていただく。7月の災害については全県で被害が91億円あり、復旧対策予算だけでも36億円計上されている。また、8月の災害では8億円を超える被害があり、県内農林水産業すべてで大変な損害を受けたと聞いている。本日出席いただいている委員の中でも、高橋委員の秋田しんせい農協の管内では5.3億円の農業関係の被害があり、柴田委員のところでは河川氾濫による枝豆の作付け被害があった聞いている。

私の会社の関係でも、小規模な林道で、川なのか道なのかわからない状況になっている箇所がちらほらあるが、被害額が40万円以下の箇所は自力で直していかなければならないため、急いで災害復旧に取り組んでいるところである。

今回の専門部会は本来8月7日に開催される予定だったが、台風5号が近づいているということで、中止された。代わりに委員の皆さんから聞き取りという形で意見を聞き、それを反映したペーパーが今回の戦略骨子案ということでまとめられ、今日の議題になっている。本日の部会でとりまとめたものを第3期ふるさと秋田元気創造プランにおける部会の提言として提出することになっているので、委員の方には忌憚のない御意見をぶつけていただければと思う。

この間の企画部会にも部会長代理として出席したが、稼ぐ農林水産業創造部会で議論されている内容について話をした。我々が問題としている小ロットの品目や加工事業の取組に対する支援について、産業労働部で様々な施策を講じているという意見や、異業種交流会・マッチングを積極的に行っているのもっと利用してほしいという意見があり、農林水産業だけでなく、いろいろな分野にアンテナを張って情報を手に入れていかなければならないと感じた。また、前回、正木委員から意見のあったICTやパワーアシストスーツについても話をしたが、産業技術センターで検証等を進めていくという力強い言葉をいただいたので、ここで紹介させていただく。

また、県立大学も農工連携、商工連携を進めていきたいという話もあったので、そのあたりも含めて、我々が対応し切れないことを他の部会と連携しながら進めていただければと思う。そうした点を踏まえて今回の部会におけ

るはじめのあいさつとさせていただきます。どうぞよろしく願います。

5. 議事要旨

◎福森部会代理

まず始めに、毎回のことだが、審議内容については議事録としてホームページに掲載され、委員名についても公開されることに御了承願いたい。

それでは議事に従い、(1) 戦略骨子案に対する各委員からの意見について、事務局から説明をお願いする。

□事務局（農林政策課）

～資料1、資料2により説明～

◎高橋委員

今、説明のあった各委員からの意見はJAにとっても課題として捉えられることだと思うが、畜産の話題があまり出てこなかった。県の方も承知のことだと思うが、家畜市場に上場される牛が過肥になっているように感じる。体重の重い子牛の価格が高い傾向なのは確かだが、それが本来の繁殖牛産地の姿なのか、いつかしっぺ返しが来るのではないかと懸念している。腹づくりのために粗飼料を給与するのが基本のはずだ。

そのため、本来の産地の姿に合わせた粗飼料生産を中山間地で行うなど、発想を変えて水田をフル活用する必要があると思う。畦畔を除去するといった大胆な施策も必要なのではないか。

併せて、畜産農家が目先の所得を優先して、生まれたてのET産子の雌牛が県外市場に流れている現状もある。30万～40万円で取引されているので魅力的な話だが、本来であれば優秀な雌牛になる可能性があるため、我々としてもいろいろと保留対策に取り組んでいる。ただ、単独JAの取組では難しい部分もあるため、行政の支援がほしいところ。

また、メジャー品目として白神ねぎを中心としたねぎの栽培が成功しており、これから収穫シーズンを迎える。アスパラガスについては施設型のハウス栽培だと茎枯病になりにくく、単収も増加する。先進事例として山形県の庄内地方では栽培が拡大してきている。庄内でできて、なぜ秋田でできないのかという思いを先日の意見聴取では伝えたつもりだ。

一方で、1回目の専門部会で柴田委員が話していたように、一気に生産が拡大する中で品質を保っていかないと、産地の信用を無くすこともある。J

Aグループにも秋田産の枝豆に実が入っていなかったというメールやクレームをいただいている。これが一気に生産を拡大するときの課題であると思う。面積を拡大しつつ、品質も落とさないようにするのは難しいことだが、よろしくお願ひしたい。

◎正木委員

大まかな話になるが、全て県内で技術開発をして農産物を商品化することは難しいので、良い技術があれば県外や海外から取り入れ、それを実証実験することで秋田の農林水産業に合った形にできるのではないか。そしてそれを逆に他県や海外に販売していくような戦略も考えられると思う。

物流に関しては、柴田委員の意見にもあるように、東京への輸送を考えるとコストや鮮度の問題で見合ったものが入らないということもあり、それが根本的な課題になっている。ただ、口で議論しているだけでは前に進まないなので、トライアルすることも必要。民間企業と連携するなどして何かやらないかという形で提案すれば、あとは重要なポイントだけ押さえればいいので、着地点には容易に到達できると思う。

人づくりに関しては成功した人のビジネスモデルや収入モデルを示すことで、相違点が見えてくる。これは農林水産業だけに限らず我々のビジネスも同じような形で成功例やビジネスモデルが出てくるので、理想的な損益計算書があればそれを目標に進められると思う。

◎柴田委員

若い担い手の育成や若者の移住促進の話が出てきているが、若者がどういう価値観で農業を見ているのか、自分でも理解できないことがある。広い範囲で担い手を取り込むのも良いが、県が推進しているのは法人化・大規模化が中心。例えば50代、60代で一般企業を辞めて就農するとき、法人に入る人もいるが自分の理想とする農業を個人で営む人もおり、後者を希望する人も多いのではないかと思う。農業者が増えることは良いことだが、個々人で方向性にばらつきがある。そこをどうするか、いろいろな人の感覚を考慮してフォローをしてほしい。

◎今野委員

父親が今年68歳だが、まだ第一線で農業を営んでいる。自分は43歳になるが、今、息子が15歳であることを考えると向こう10年程度の状況は厳しい。そこまでどのようにして現在の経営規模を維持していくか。不足する労働力を埋めるとなると、どうしても家族以外の雇用を考えざるを得ない。だから

こそ、労働力確保や人づくりを重点的に進めていかなければならないと思う。自分も経営者として、雇用している人たちにどのようにやりがいを持って仕事を進めてもらうか、また、その対価としてどのように評価してお金を払うのかを考えている。一般企業に当たり前にあるような、こうした仕組みを定着させることが、より一層重要になってくるのではないかと。

現状では全く人手が足りていない。今雇用している人たちはアルバイトのような形で働いてもらっているが、正規で就職するのであれば、昇級や仕事の評価の仕方を決めていくのが難しくなる。農業は一般的な製造業とも違う部分があり、悩ましい。

環境保全型農業の展開については話題になりにくいところもあるものの、秋田県と沖縄県だけは、ゲンゴロウが絶滅危惧種になっていない。赤とんぼの減少等も農業分野の問題として改善していかなければならない時代も来るのではないかと。

また、3～4年前に大潟村でバカ苗病が大発生し、水稻種子生産が滞ってしまったことがあった。今はバカ苗病の菌のDNA検査をしながら、菌がどのくらい飛散するか県立大学が調査を行っている。種子圃場から500m以内にバカ苗があれば不合格となるのだが、実際はそれほど飛んでいないとのデータもあるようだ。調査中であるので結果がすぐに新しいルールとして採用されるのは難しい中、来年は種子生産者として活動を再開できる見込である。再びバカ苗病が発生して種子生産が取り消しになることのないよう、指導していただければと思う。

◎佐々木委員

7月に県内で大雨が降ったとき、にかほ市の方はそれほど降らなかった。しかし、大雨が降ると象潟のあわびセンターが水を取り入れている漁港に町中の雨水が入ってきてしまい、稚貝に悪影響を及ぼすことが懸念される。何年か前に実際にそのようなことがあった。大雨が度々あり稚貝が死んでしまうと困るので、雨水がたまらないところからセンターの水を取り入れられるように設備を整えるなど、早めに対策をしてほしい。

キジハタについては30センチくらいのもものが増えてきた。男鹿の水産振興センターで引き続き研究を頑張ってもらいたい。

山形の方で寒ダラやサワラがブランド化しているようだが、魚を両手で持つなど丁寧な扱いが徹底されている。ただ獲れば良いのではなく、そういう努力をしていかなないと価格の向上にはつながらないのではないかと。

また、ハタハタの資源量が減ってきている。市場に流通しているのは雌ばかりで、雄が売れ残ってしまう。雄もある程度の価格で流通できるように対

策してほしい。先日、テレビで見たが、原発の事故があった影響で禁漁した福島ではヒラメの資源量が増えているようだ。秋田もかつて禁漁をして一時期資源量が増えたが、今は減っている。資源管理には県の協力が必要なので、よろしく願います。

◎福森部会長代理

丸太の消費や再生林に関する県の指針を考える必要があると思う。丸太は県内で消費し切れないので、柱にするなど加工をして高価格で県外に出荷すべき。

また、園芸の話題が委員からはあまり出ていなかったが、県としてどう戦略に盛り込んでいくのか、少し不安な気持ちもある。

今、各委員から意見が出たが、山本課長どうか。

■山本課長

全ての意見を説明したわけではないので、委員皆さんの意見を網羅し切れていなかったところもあるかもしれないが、いただいた意見は参考にしていきたいと考えている。

◎福森部会長代理

委員からの意見について、事務局から他に何かあるか。

～意見無し～

それでは、次に議事（２）、当専門部会からの提言書（案）について、事務局から説明をお願いします。

□事務局（農林政策課）

～資料３、資料４により説明～

◎福森部会長代理

今、事務局から説明のあった事項をもとに当部会の提言書を作成することになる。先ほどと重複してもかまわないので、各委員から御意見をいただければと思う。

◎高橋委員

この部会の課題は稼ぐ農林水産業ということで、大規模な経営体や法人の

育成、園芸メガ団地や大規模畜産団地の整備に重点的に取り組んでいると思う。ただし、大規模な経営体だけでなく、小規模な農家を支えることも、JAの使命。来月から妊娠牛を預かる周年預託施設が、県の支援を受けて稼働する。10頭程度を飼育する小規模農家の牛も対象になっていて、ありがたい。

そういう守りの部分も必要なので、小規模農家のカバーやフォローもしっかりしていただければと思う。夢プラン等も継続してほしい。

また、県の事業を活用して加工品を輸出しようと思っているが、食生活の違いが大きな壁になる。例えば東南アジアでは米を炊かないが、そこでどのようにして秋田の米を食べてもらうか。県の施策としてどのぐらい稼げるようになったのか、すぐに結果が求められると思うが、こうした取組は成果が出るまでに時間がかかっても、中長期的な視点で絶対にしなければならないと思っている。この部分も理解してほしい。

新たに薬用作物の産地化を図ろうとしているが、多くの小規模農家で取り組むという戦略も考えている。農業を生業として大規模で稼ごうとする中核的な農家を支援しながらも、地域で頑張っている多様な農家も支援していきたいので、一緒に活動してくれればと思う。

◎正木委員

今、高橋委員がおっしゃったように、大きなところから小さなところまで支援するのが大切。せっかくこうして専門家が集まっているのだから、理想とする5年後、10年後の大きなビジョンや戦略だけでなく、一つ一つの具体策についても話し合えばよいのではないか。その具体策の一つとして、インバウンドや輸出入の話題も関係してくると思うので、それをどう検討し、まとめていくかが重要だと思う。先々週、佐竹知事の台湾訪問に同行したが、現地の方は秋田牛をおいしいと言ってくれた。これから輸出の門戸が広がっていきそうなので、いろいろ仕掛ければインバウンドも増えて、秋田の飲食店の知名度も上がっていく。そうすれば好循環が生まれる。

◎柴田委員

高橋委員と正木委員からも話があったが、大きい経営体だけでなく、小さな農家もしっかりと支援してほしい。移住希望者は県北や県南で就農するケースも多く、担い手を外から取り込むため、東京でのプロモーション活動も展開していると思うが、私の知り合いの若い農業者は素朴・まじめで、独身の人も多い。まじめに農業に取り組んでいるが、元気がなく、自分で積極的な発信をしていないので、そこに関東の女性がお嫁さんに来てくれると活性化につながると思う。さらにその女性が県外に発信してくれると、秋田のP

Rにもなるし、異業種との連携にもプラスに作用するのではないか。そうしたイベント等も含め、ぜひ検討してもらいたい。

◎正木委員

総政審でも話したが、我々の会社は県外にも支社があり、そこで秋田県出身者も働いている。その中で秋田に戻りたいという人は結構多い。また、東京の店舗で働いて秋田を宣伝したいという人もおり、2、3年前に比べて秋田に戻りたい人や東京で秋田を宣伝したい人は確実に増えている。柴田委員が話したように、そのあたりを喚起し、Uターンとまではいなくても秋田に関わりのあるところで働いてもらって、秋田のスポークスマンになってもらえるような仕掛けがあればおもしろい。

◎福森部会長代理

今、担い手の話が出たが、今野委員のところでも雇用の谷ができるのではないかという話をされていたが。

◎今野委員

人づくりに関して、私の農場で雇用している人は日給1万円で土日以外働き、月25万円くらい稼いでいる。仕事の内容は、今は草刈りが中心で、日給1万円は少し高い気もするが、月25万円でどのくらいの能力の人が来るのかわからない。建設業や土木業と比較して、働いてくれる人の年齢が35歳くらいだと、どんな生活ができるのか。企業として、働いてくれる人達に子どもが生まれて大きくなり、家族を支えられるだけの給料を支払うには、どのくらい売り上げが必要か、しっかり高付加価値のものを作っていけるのか不安はある。自分もどんどん体力が落ちていく中で、どう労働力を補うのかが課題。

複合型農業については、メガ団地を視察して、うまくいっているところと厳しいところがあると感じた。その中で、飛び抜けた方法に取り組んでいるところが全体の方向性を変えていく印象を受けた。一方、難しいことにチャレンジしたときのセーフティネットも必要。もちろん成功してほしいと思っているが、リスクヘッジができる地域の方がチャレンジしやすい。大潟村のことでいえば、米の値段が下がると言われる中、村民は奮闘していると思う。私自身も更なるコスト削減のため、GPSの利用などについて調べ始めた。いかに設備を安く導入できるか、また、精度を上げていくか。ぜひGPS等も活用していきたい。

輸出についてはあまり考えていない。

農山漁村づくりについてはもう少し突っ込んで、具体的な記述を盛り込んでもよいのではないか。何がどのくらい必要なのかがわかれば、地域の今後の姿も見えやすく、例えば特定の生き物の数をこのくらい増やすことを目標にすることなどを決めてみてはどうか。そもそも自分の地域の環境がどうなっているのかをしっかりと科学的に調査することも大事になるはず。そうすれば、どう定義するかにはよるものの、高質な田舎に近づけると思う。極端な話だが、仮に稼げて年一回海外旅行に行けるような地域になっても、カエルやトンボが一匹もないような田舎が高質な田舎と呼べるのだろうか。規模拡大は必要だと思うが、一次産業は自然環境が土台となっている。そのあたりをもう少し具体的に計画の中に落とし込めれば、10年後20年後に環境にやさしい秋田県農業として付加価値がつくのではないだろうか。

◎佐々木委員

何年前か、ブランドで有名な関サバの漁港を見に行ったが、釣るときにサバに触らず、釣ったあと重さを量るときもはかりではなく、目で量っていた。また、何日か漁港でサバを寝かせてストレスを取る工夫もしていた。それから締める作業を行うが、漁港の人が締めたものしか関サバと呼んだり、ラベルを貼ったりできない。ブランド化するにはそれだけの気を遣う。宣伝だけではなく、いいものを出してこそブランドになるのだと思い、驚いた。ブランド化するには他の人がしていないことをする必要があり、魚を高く売るには活け締めをするなど、他の人と差をつけておいしくする必要がある。宣伝だけでは難しい。

◎正木委員

その方法で締めるとおいしいのか。

◎佐々木委員

自分で釣ったものを刺身にするとしたら、その場で締める。にかほの方でも釣って血を抜いて処理するが、漁師は昔から当たり前のように行っている。特に、かつおやサバはそれをしないとおいしくない。昔は自分たちが食べる分だけその処理をしており、傷物みたいになってしまうので、販売するものにはしていなかった。実際に血を抜く処理をした方がおいしいし、少しでも味が落ちるとブランドにならないと思う。

◎福森部会長代理

林業は植えてから伐採するまで長い年月がかかるうえ、木の年代によって

使用方法が変わることもある。今、伐採されている木を植えた人たちは、将来良い柱になると思っていただろうが、秋田県では一番古いものは合板用になってしまう。目先の目標を追いかけるのではなく、長いスパンで秋田の木材をどう消費していくかを考える必要がある。農業で類型の話をしてきたが、林業に携わる人たちにもこうすれば儲かるという指針・指標を示してほしい。それを失っているから山を放棄して町に出ていく人が増えているのではないだろうか。

農業と同じで、木についても秋田スギなどのブランド力は大切。この間、企画部会での議論の中で、いぶりがっこを作りたいが、秋田産の大根がなく困っているという話があった。秋田産の大根で作るいぶりがっこを商標登録したいが、他県産の大根も使用しているので、国産大根としか表記できない、と。農業と商業の連携も必要だと感じた。

鳥獣被害対策に関しては、林業分野でも重要。熊がよく出没しており、イノシシやニホンジカの被害も心配している。鳥獣は木材や農作物の一番利益になる部分をわかっているので、先手先手で手を打たなければならない。全国には先進県もあるので、秋田も参考にしてほしい。

他に意見はないか。

～意見無し～

◎福森部会長代理

今、ここで話せなかったことがあれば、後で事務局に伝えてくれれば個別に対応する。

次は議事（3）その他 だが、事務局から何かあるか。

□湯元次長

いろいろな意見を出していただき、感謝する。第3期プランの作成にあたっては、4年先まで見据えなければならない。委員の話の中にも5年、10年先という話があり、当然、それもイメージしているが、大規模法人だけでなく、小さな農家も支援する目線を持ってプランを作成していく。ただ、事業の中で進めていく部分と施策として大々的に掲げる部分があり、なかなか難しいところだが、我々の中でも精査する。

移住に関しては、首都圏と秋田県側で互いに報告する形で情報交換をしっかり行うことが重要。前回申し上げたとおり、農林水産部だけでなく、オール秋田で取り組もうとしている。市町村も移住対策に熱心に取り組んでいる。

県、市町村、関係団体が協力して一枚岩になり、全県の取組を首都圏に発信して、できるだけ秋田への移住を促進したい。また、そのための適切な情報提供も行いたい。

恐れずに大局観を持って海外展開をするという話もあったが、単純な提携だけでなく、海外へのルートをうまく使いながら進める必要がある。ただ、それは我々の苦手なところでもあるので、様々な企業と連携しながら勉強させてもらい、一步でも二歩でも前進につながる柱立てにしたい。

様々なチャレンジのリスクを支える仕組み、セーフティネットについて。一つの企業や法人がチャレンジする際の単なる砦を造るだけでなく、相談できる体制や課題を一緒に解決する方策を練る。農家に寄り添った対策をどう具体的な実効策として示すか。

類型の指標や指針を示してそれが判断につながるような情報提供をすべきだが、なかなか今までできなかつたところなので、林業の分野も含め、案を考えられればと思う。

農と商の連携について。前々からの課題でもある。産業労働部や観光文化スポーツ部との連携も含め、オール秋田で庁内の連携を密に行い、実効性が見えるように取り組みたい。

鳥獣害対策について。まさに守りの部分だと思う。また、7月に全県域で発生した豪雨のような災害もある。従前からの連絡体制、情報の管理、初動として動ける体制の構築が重要だと今回、肝に銘じた。内部の要綱はあるが、実際の情報伝達訓練等もしなければならぬと感じている。また、県や地域との連携も必要だろうと思う。

□事務局（農林政策課）

本日が今年度最後の部会になる。委員の皆様にはお忙しい中、出席いただき感謝する。本日の意見を踏まえて部会からの提言案を審議会に提出したいと思う。

□湯元次長

本日は長時間にわたり議論していただき、感謝する。この第3期プランは先ほど申し上げたとおり、4年先を見据えて作成していく。地域の方や委員の皆様から意見をいただき、それをまとめる、そのときの一つの視点としては、課題の解決であったり、伸ばす部分をさらに伸ばすことであり、先手を打つ施策を組まないといけない。

4年間の計画を作ると1、2年後には社会情勢や地域情勢が変わり、計画の中でも現状にそぐわない部分が出てくる。大きな政策・施策はそう簡単に

は変わらないが、いただいた意見をきっちりフォローしながら進めていくプランにしないと、せっかくいただいた提言がなかなか生かされないということになりかねない。その辺は議論しながら進めていくので、よろしくお願いする。

プランの実行の部分について。絵は描けたが、それを実行に移さないといけないが、財源の問題もある。農林水産部には農林基金というものがあり、163億円程度を6年間かけて活用してきたが、基金も今年が最終年度になる。この、新たなプランを進める際の財源をなかなか示せない状況にあるが、財源の手当も内部で検討しているので、一定の時期にはお示しできると思う。どこに軸足を置いて事業化し、実行するのも示していかなければならない。市町村や関係団体とも、どう連携していけるのかを踏まえながら進めたい。

今日は様々な意見をいただいたが、さらにいろいろな場で御意見を頂戴し、より良いものにまとめていきたい。

◎福森部会長代理

本日が今年度最後の議論になる。提言書の最終案の作成をよろしくお願いする。委員の皆様から何かあるか。

～意見無し～

◎福森部会長代理

それではマイクを事務局にお返しする。

□事務局（農林政策課）

本日は長時間にわたってご審議いただき、感謝する。以上をもって平成29年度第2回稼ぐ農林水産業創造部会を閉会する。